人造人間　～エピソード編～

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人造人間　～エピソード編～

【Ｎコード】
Ｎ４０３６Ｏ

【作者名】
大輔華子

【あらすじ】
投稿済『人造人間』のエピソード編。本編の研究所所長　遠藤雄二とその妻となるウメの独身時代の物語です。本編を読まずにこちらだけ読んでも内容は理解できるようにしていますが、順序的にこちらを先に読むと本編のネタバレになる内容も含まれていますので、その点お含み置き下さい。

【前編】

＜一＞

株式会社ニュートンは、都内に本社を構え従業員が百人ほどの中堅企業である。

社名がニュートンといっても、その会社は物理のニュートンとほとんど、いやまったく関係のない、医療用の人工臓器等の開発委託を主とする研究開発会社である。

一般に『臓器』などと言うと何やら胡散（うさん）臭い印象を受けることもあるが、その会社は専（もっぱ）ら科学者や医師のチームによる研究開発を目的としており、臓器そのものの提供を受けたり、売買したりすることは全く無い。

ここで言う人工臓器とは、世に知られる人工透析や外科手術の際に使用される人工心肺のような外的手段によって人間の臓器の役目を一時的に代替する医療機器のことではない。あくまで、人間の体内にあって神経細胞を経由して脳や脊髄などから送られてくる直流電気信号を受け取り、物理的な運動や有機化学反応を司（つかさど）る人工的な臓器を言う。

人工臓器は生身の臓器と違って、完全に生理的な状態を作り上げることは困難であり、臓器側から脳へ情報を発信することもできない。さらに、他の臓器の不具合を補完したり、自ら不具合が生じた場合に修復する機能も持たないため、生身の臓器移植に比べ高価な割に移植成功率や移植後の生存率は格段に低い。にもかかわらず、各社は躍起になって、人工臓器の開発を水面下で進めているのはいったい何故であろうか……。

その決定的な理由は、生身の臓器はその細胞の中に『寿命』という情報が刷り込まれているのに対し、人工臓器はそれが無いということである。つまり、その臓器だけを考えれば、不老不死ということだ。不老不死は人類永遠の憧れであり大きな魅力あるテーマだ。少々の危険を冒してでも手に入れたいという気持ちはわからなくもない。

◇◆◇

その会社の第一研究所には、遠藤雄二という大変研究熱心で若い『天才的』な社員がいた。

巷に、『馬鹿と天才は紙一重』などという言葉があるが、彼の場合それがぴったりと当てはまるかも知れない。彼は根っからの研究者であり、すこぶる温厚な性格ではあったが、生来、人付き合いがへたなため、いつも他の研究者から離れて黙々と研究をしていた。

この研究所では、第二研究所での基礎的研究成果を受けて、実用化のためのさまざまな実験を行っている。そして、どの研究者も出来得る限り生身の臓器を忠実に再現するということに力が注ぎ込まれていた。そんな中、遠藤はそんなことをしても無駄だと心の中で一蹴する。

彼に言わせると、そもそも人間の肉体は小宇宙に匹敵するほど限りない未知の神秘に包まれているという。

細胞はその機能が著しく低下する寸前に分化して、自らと全く同じコピー細胞を造り上げる。このことによって人間の活動を司(つかさど)る肉体は元の機能を維持していける訳であるが、実はそれだけでは生命

体の維持を完全なものにするに充分ではない。

細胞には、先に述べた通り、どういうわけか『寿命』という情報が刷り込まれているようであり、分化の回数に限りがあると考えられているからだ。　何故そうなっているのか。理由は確かな保証を得られているものではないが、一般的には、生命体を取り巻く環境は常に変化する可能性があり、同じものを造っていくだけでは『種』の保存ができないためだ、と考えられている。

ある種の生命体は進化するために必ず『命』をリセットし、環境に適応した新しい生命体を造る機会がなければならないのだ。

細胞には大きく分けて二種類あり、一つは自らと同じコピー細胞を造るものである。いま一つは『幹細胞』といわれる細胞で、この細胞は人間の肉体を形成する情報を既に持っていて、色々な種類の細胞に分化することのできる細胞である。

幹細胞のわかりやすい例としては、『受精卵細胞』がその筆頭に挙げられる。受精卵が分裂して細胞の数が増えていくにつれ、どの細胞がどの組織になるかということが次第に限定されていくのである。この幹細胞があるからこそ、人間は命をリセットし、新しい環境に適応することのできる『命』を得て、進化を遂げていく事ができるのだ。

人類生命の将来は最初の幹細胞である受精卵細胞の適応力に賭けられているといっても過言ではない。　そしてその『種の生き残り』を賭けた意気込みは我々が普段考えるような生半可なものではない。

その凄さを数字で示すと、例えば標準的な人間の『精子』は一秒間に約一千個づつという猛スピードで造られ、五日弱で四億ものス

トックを形成し排出される。このような生成は他には類をみないためその目的意志は明確に認識できる。つまりそれは、種の保存のため四億分の一の強靭な生命体を造るための一つの過程であり、間違いなく人類という『種』を保存しようとする意志である。

男子陸上百メートル走の世界記録保持者、ジャマイカのウサイン・ボルトは九秒台半ばで百メートルを走り抜ける。彼の持つ記録はまさに驚異的なものであるが、百メートルを走り抜けるその間に彼の体内で一万個もの精子が生成されていると考えると、そちらのほうも負けず劣らず凄いことである。これは無論ウサイン・ボルトだけではない。筆者はそう考えながらその辺を歩いている普通の殿方達を見るにつけ妙な気分にさせられるのだ。（筆者は科学者の卵の端くれであり、純粋に科学的見地から話を展開している。特段の他意はない）

話が少し脱線した。もとに、戻そう。

こうしたことを考えると仮に細胞組織に似たものを造ったとしても、その能力は生身の細胞の足元にも及ばないことは明白である。そうであれば、人間や動物の肉体を今ある通りに再現することなどやめて、複雑な脳や脊髄細胞の直流電気指令を忠実に受け取り、機械のように人間や動物の動きを再現できる肉体を全部勝手に造ってしまえばいいのだ、と彼は考える。

そうなると、人工臓器ではなく、まるごと人工肉体である。

限りなく人間の肉体組織に似たものを造り出す技術があれば、そんなことは容易（たやす）いことだ。あとの問題は脳信号の解析であり、これは時間さえかければ達成可能であるように彼には思えた。

こうして、馬鹿か天才か定かでない遠藤は脳信号の解析に日夜奮闘していた。

＜二＞

世の中不景気なわりに、研究所はいつも忙しかった。

そんな中で自分勝手な研究を進めている遠藤は、ますます他の研究員と疎遠になっていった。しかし彼には所内でたった一人だけ心の通い合った人間がいた。

滝川ウメ……。

ウッ、ウメ？　今どき珍しい名前だ。名前からはご高齢の方を連想するが、これがまだ二十歳になったばかりの女性だ。

遠藤の助手である。彼女は研究者ではないので、個別のテーマを持っていない。そのため複数の研究者の助手を担当していたが、事実上遠藤が彼女を完全に助手として独占してしまっている。

「ウメッコ。豚の腎臓取ってくれる」

「あいよう。雄二」

「……。あのね、これ肝臓なんだけど」

「ええ？　あいよう。雄二」

「……。あのねえ、これすい臓」

「ええ？　あいよう。雄二」

「……いい。自分で取るから。肝臓とすい臓戻しといて」

「あいよう。ごめん雄二……」

◇◆◇

ウメの両親は彼女が六歳の時に離婚し、当時彼女は弟、隆雄と共に母親に引き取られたが、引き取られてまもなく母親が病死、父親も別な女性と海外へ行ってしまい、その後行方が知れず仕方なく姉弟は施設へ預けられた。

ウメは中学卒業後自らの意志で施設を出て、株式会社ニュートンへ就職した。三つ年下の隆雄はその後も施設に留まっていたが、今春高校を中退し、ウメのいる研究所近くのガラス工事の店で住み込みで働くことになった。

ウメは唯一人、血の通った隆雄のことが気がかりで仕方がなかった。

隆雄は先天的に知恵の発達が人よりやや遅れていて、動きもぎこちない。誰かが見ていてあげないと少し心配なところがあるのだ。ガラス店さんのおかみさんは朗らかで優しい人だったが、夫が工事現場を走り回っている間、事務所での電話の応対や雑用一切を任されているため、殆ど隆雄の身の回りの面倒をみてやることは出来ない。隆雄は買い物一つ、自分一人では心もとないのだ。

ウメは毎日自分のアパートに帰宅する際にガラス店さんに寄り、隆雄の様子を確認して色々と話しかけることが日課になっていた。食事は別支給で、月三万程度の隆雄のお給料は当然ウメが預かることにしている。

「おねえちゃん。俺、お腹すいた」

「もう少し待ってね。もうすぐお夕食があると思うから。今日は一緒に食べようか」

「ええ？　お姉ちゃん。ご飯一緒に食べる？」

隆雄の顔は上気して興奮している。

「今日はね。隆雄くん。一緒に食べようか。おばさんに言っておくから、ねっ」

姉と一緒に食事。

たったそれだけのことで、隆雄の目からはぼろぼろと涙が落ちた。

ウメの気持ちはとても複雑だった。

＜三＞

「おーい。ウメッコ」

「はーい」

「今夜はおまえとイタリア料理食べるぞ」

「わあ。うれしい」

「豚はやめとこうな」

「ほんと。やだ」

「ははは」

雄二と一緒にいる時は、ウメにとってはとても心が休まる時であった。それは、弟の隆雄を忘れることのできる時でもあったからだ。

いや、それだけだはない。

ウメは雄二と二人でいる時、自分が生きている事を実感できた。

これが恋、とか、愛、とかいうものか。

ウメにはよくわからなかったが、ともかくこれでいい、と思うと限りない安心感が彼女の胸にこみあげてきた。

しかし、いつも雄二と別れ、隆雄のもとへ寄ると、自分の気持ちをどのように処理して良いのかわからなくなることがしばしばあった。

◆◇◆

何の予告前ぶれもなく、突然の不幸がウメのもとに訪れた。

「所沢東警察です。滝川ウメさんですか？」

「はい。そうですが……」

「弟さんの隆雄さんとみられる方が交通事故に遭われ、現在、所沢

東総合中央病院に移送されておりますが、身元が確認できません。来ていただけませんか」

「ええっ？」

神に祈るようにして病院に駆けつけたウメは、この先の人生の行き先を完全に失った。

息もせずウメの目前に横たわる隆雄。下半身は無残に潰されこれが人の姿かと、今ある目の前の現実を疑いたくなるような状況であった。

「隆雄？　隆雄どうしたの？　あなたはいったいどこにいるの？まさかあなたじゃあないよね……」

「弟さんですね」

「……。いいえ違います」

「……」

「弟は家にいますから」

「……」

「滝川さん。お気持ちは察します。でも、亡骸を仏にしてやっていただけませんか」

「ああ。あああ。隆雄う。ううう。ううう」

気持ちの行き場所を失ったウメの心は、無意識に雄二の携帯を呼び出していた。

十数分後病院を訪れた雄二は、ウメの姿を確認すると力一杯彼女を抱きしめ、彼女の悲しみを少しでも自分にわけてもらうよう祈り続けていた。

……このままで済まされるものか。造物主よ！　あなたはどこまで残酷なんだ。どこまでウメの心を傷つければ気が済むのだ！　……。

＜四＞

三ヶ月後、第一研究所の実験室では、ネズミがからからと丸い車輪の中を走り続けていた。
隆雄の葬儀のごたごたのあと、しばらくウメは家に引きこもっていたが、ようやく研究所に職場復帰した。

「ウメッコ。ついにやった！　完全な肉体だ。世間に公表する時がきたぞ！」

「何があ？」

「このネズミを見ろ」

ウメはネズミの入ったかごを覗き込んだ。

「このネズミは一種のサイボーグだ。脳と脊髄以外は全て人工のものだ。」

「これが？」

「もう一カ月以上生き続けている。もう大丈夫だ。完全に生身の状態を再現している。脳波を調べても苦痛信号は一切ない」

「へえ～」と疑いの目をするウメ。

「へえ～、じゃない！　本当だ。これがエックス線写真だ」

ウメは中腰で貼られた写真を見る。

「これ、どう見ても普通のネズミのレントゲン写真じゃない？」

「違う！　良く見ればわかる」

「うんにゃ。普通のネズミだよ」

「ウメッコ！　お前はバカか。俺がこれを造るのにどんだけ努力したかわからんのか！」

「わかんない」

「……。おまえ、いちいちすぐに応えるな！　気が抜ける」

「雄二。これ、公表してもアホだって言われるよ。きっと。私はやだ」

雄二は泣きそうな顔になった。

「ウメ。おまえ、どうしてそういうこと、さらっと言うわけ？　ひ

どすぎるよ」

「だってやだもん。私、みんなの前で馬鹿にされるの嫌だもん」

「くう〜〜」

「ねえ、雄二。そのネズミじゃなくて、ひょっとしてサイボーグネズミはこっちのネズミじゃない？　こっちの方が顔がそれっぽいよ」

「何？」

「このネズミ……」

雄二はウメの指差すネズミの方をじっと凝視する。

「あれ？　そうかな？　こっちがそうだったっけかな」

「そうそう。このネズミちょっとこわい顔してるもん」

そのネズミはこわい顔をして雄二の方をじっと見つめている。

雄二はウメに指摘され自信がなくなってきた。

「いやいや。やっぱりこっちだ」

「ううん。私はこっちだと思う」

「そうかなあ……」

ウメはため息をついた。

「ダメじゃん」

雄二もため息をついた。そしてとりあえず公表は見送ることにした。

……俺、嘘言ってないんだけどなあ。信じてもらえそうにないなあ……

「ねえ雄二。ネズミみたいなセコイ動物じゃなくって、豚の肉体造って猫の脳で動かしてみたら？」

「ああん？」

「ほら、豚が『にゃーん』とか鳴いたらはっきりするんじゃない？」

「そっ、そうか！　それだ！　それで行こう！」

……あれ？　雄二のやつ。本気にしちゃったみたい……

◆

三ヶ月後、第一研究所の実験室には一匹の豚がいた。

「ウメッコ。やったぞ！　完全な肉体だ。この豚を世間に公表するぞ！」

ウメは豚の入ったかごを覗き込んだ。

「完全に生身の状態を再現している。脳波を調べても苦痛信号は一

切ない」

ブヒッ。

ウメは首を傾げた。

「今、ブヒッて鳴いたけど……。にゃーって鳴かないの？」

「残念ながら鳴かない。声帯と喉の構造が豚だからにゃーとは鳴けないのだ」

「それってダメじゃん」

「いいや、歩き方を見てみろ。明らかに猫だ」

その豚は餌を求め、とぼとぼと、ごく普通に歩いている。

「これ、豚じゃん」

「足が短いからな。やっぱり猫歩きは難しそうだ」

「それってダメじゃん」

「おい！　おまえ、ひょっとして俺のこと疑ってないか？」

「疑ってるよ」

ウメは間髪を入れずに答えた。

「くううう。猫は腹を上に向けて落としても、きちんと足から着地す

るんだ。見ていろ！」

雄二は豚を抱いたまま、椅子の上に上がり、腹を上に向けてそのまま腕を放して見せた。

サイボーグ猫かもしれない豚は、そのまま落下した。

ブヒーーーッ。

ウメはため息をついた。

「ダメじゃん」

雄二もため息をついた。そしてとりあえず今回も豚猫の公表は見送ることにした。

【後編】

＜五＞

ウメは研究所で雄二の助手をしていて、たびたび亡くなった弟の隆雄のことを想いぼうっとしてミスをすることが多くなってきた。昨日も神経細胞に当たる配線を間違えて、脳に電気が逆流し危うく大切な脳細胞を破壊してしまうところであった。細かなミスは数えだすとキリが無い。

喜んで耳を振る犬。
後ろに歩く猫。
空飛ぶネズミ、マイティーマウス。古い！
盆踊りを踊る牛。いや、ないない。
『転職に人間力を！』の広告を見て人間になった豚。だからないって！
髪切ってボーイッシュになった私。いったい何の話だ？
どこまで広げるんだ！　……。

恐るべきことに、ウメは筆者の頭に電流を逆流させていた。

人間の頭脳は都合よく、亡くなった人に関する負の感情、すなわち悲しみや憐れみなどの感情を次第に記憶の領域から除去していき、現実の世界を取り戻し維持していくようプログラムされているといわれる。寝ている間にみた夢は基本的に寝ている間に記憶から除去されているし、起床直前にみた夢でも起きてから急激に記憶が薄れていくことがわかる。どれもこれも、現実の世界と取り違えないためのプログラムだ。

ウメはこのことを雄二から聞かされていたので、隆雄に関する悲しみは次第に薄れていくものと考えていた。しかしながら、ウメの脳にはこの回路が欠落しているのか、日が経つにつれ、どんどんと悲しみが増していった。

このままだと、ウメは助手どころか雄二の研究の足を引っ張っていってしまうと考え、この会社を辞めようと考えた。

ウメは雄二のことを頼りにしているし、特別な恋愛感情が既に心に芽生えてきていることも自分自身気づいていた。だからなおさらのこと、雄二のもとを離れることはウメにとって胸が締めつけられるような思いだった。

……でも、このままでは私も雄二も駄目になってしまう。今が引き時だ……。

雄二はウメの退職願を手にし唖然とした。しばらく悲痛な顔をしていたが、思い立ったように言った。

「ウメッコ……。俺は君のことを待ち続けている。いつか必ず戻ってきてくれることを信じて……」

「雄二。さようなら。いろいろありがとう」

「いろいろねえよ。あるとすればこれからだった。ははは」

雄二の瞳は涙に覆われたような光を放っていた。

◆◇◆

ウメは背中に雄二の強い視線を感じながら、一度も振り向かずに研究所正門をあとにした。

研究所の脇は古びた喫茶店。その隣にはペットショップがあった。中学を卒業してから五年間通い詰めた道ではあったが、その両方とも、一度も店の中に入ったことはない。ウメはここを通るのも最後だと思い、ふらっとペットショップの中へ入っていった。

『爬虫類ペット、大特価セール』

大きな紙に書かれた文字がいきなり目に飛び込んできた。

……爬虫類セール？　変わってるなあ……

「いらっしゃいませ、爬虫類が今日まで全部表示価格の半額です」

以前、都心のワンルームマンションでイグアナを飼っている女性がテレビで話題にされたことがある。

……私もやってみようかなあ……

半額なのかどうかは、もともと定価など無いようなものだから全く当てにはならない。『今日まで』というのも、今考えたようで怪しい。

しかし、ウメはこの店で何か生き物を買っていこうと思った。そうしないと寂しすぎるのだ。しかしウメはトカゲだのヘビだのイモリだの、この類は大嫌いである。（※イモリは爬虫類ではありません。カエルの仲間です。念のため）

「すいません。これなんですか。目のでっぱってる変な動物。十万円の……」

「ああそれはカメレオンですね。それはすいませんが半額は無理です」

「そうなの。爬虫類じゃないの？」

「爬虫類ですが、値引き対象外なんです」

「じゃあこのみどりのアゴの大きい奴は？二万円の……」

「ああそれはイグアナです。その価格は昨日までです。今日の定価は四万円です」

……今日の定価って？　なんで上げるの？　普通下げるでしょ！

……

ウメの手元には、今日までの日割のお給料八万円と亡くなった隆雄の先月の給料三万円の合計十一万円があった。ペットなど普通、衝動買いするようなものではないが、ウメは今日一人でアパートに帰り落ちついた気持ちでいられる自信が無かった。何か買って帰ろうと……。

ウメがきょろきょろと求める動物をさがしていると店の奥にある銅像のような変な動物が目に入ってきた。値札に二十万円と書いてある。

「あれは何ですか？」

「ああ。あれですね。さすがにお目が高い。ハシビロコウという鳥ですよ」

「ハシビロコウ？」

ハシビロコウ……。

解説しよう。正直なところ、読者の方の想像に任せるのが筆者としては最も楽である。ある人はニワトリを想像し、ある人は大鷲を想像する。しかし、筆者の性格はそういうことが嫌なので、読者に嫌がられても強制的に『ハシビロコウ』を解説する。ちょっと我慢してね。

ハシビロコウは、アフリカ大陸原産の鳥で、主にウガンダ共和国のビクトリア湖周辺に見られる。ワシントン条約で国際取引が規制されている希少種である。

全長約1．2メートルの大型の鳥類である。この鳥は初めて見た者を『ぷっ』と笑わすようなものすごくアンバランスな巨大なくちばしを持ち、数時間にわたってほとんど動かないのが特徴である。これは大きな図体で動き回り魚に警戒感を起こさせることを避けるためと考えられている。魚もそこに生き物がいることを認識しないほど動かない。大型のハイギョ（魚）が「安全、安全」と空気を吸いに水面に浮かび上がる隙を見て、「はっ」と素早くくちばしでこれをとらえる。

岩のような灰色をして、銅像のように固まっているこの鳥は、これを見る人間にとってちょっと気味が悪いかも知れない。しかもその目つきの悪さは他に類を見ない。飛行も得意とし、翼を広げた時

の長さは約2メートルにもなる。

この目つきの悪さと滅多に動かない生態。ただ一つ動くときは餌を本気で採るときと、親愛を示す時の首振りのお辞儀。これがとてつもなくキモ可愛いという。（筆者は残念ながらお辞儀は見たことが無い）

筆者は、そんなハシビロコウが大好きである。！！

寿命は解明されていないが、高齢になるに従い瞳の色が金から青に変化する。これも好き！

「これ、爬虫類セール対象ですか？」

「……」

店の主人は呆れたように言った。

「あのね。お客さん。どう見たらそれが爬虫類に見えるんですか？それじゃあ二万円引いて十八万円にまけときましょう。どうですか？」

ウメはその変な鳥がどうしても欲しくなり、おかしなことを言い出した。

「あれ、やっぱり爬虫類でしょう？」

「ええ？　お客さん。ふざけちゃいけませんよ。いやだなあ」

「うんにゃ！　私、この鳥知ってます。あなた知らないの？　これ

ワニ科の動物よ」

「！！　……。お客さん。ははは。今、お客さん自身、『この鳥』って言われましたよ」

「うんにゃ。『鳥に見えるこの動物』って意味よ。この目をよく見てごらんなさい。これは爬虫類の目です。ペットショップやっててあなたそんなこともわからないの？」

店の主人はハシビロコウの目を見た。

ハシビロコウの目つきは相当悪い。その目でじいっと主人の方を見返している。

……あれ？　やっぱ、ワニに似てるかな？　いやいや。そんな馬鹿なこと……

「お客さん。くちばしが見えませんか？　鳥ですよ。トリ」

「あなた、カモノハシって動物知らない？あれはくちばしがあるけど立派な哺乳類よ。くちばしとか羽根とか見た目は分類に関係ないのよ。バッカじゃないかしら」

「ムッ！羽根って……。羽根のあるワニはダメでしょう。いくらなんでも」

もはや全然会話になっていない。

「もう、いい加減にして！　あなたまさかラドンとかギャオスとか知らないの？」

とうとう怪獣まで登場してきた。ウメはもう必死である。完全に大阪のおばちゃん状態だ。

ウメはきっぱりと言った。

「十万円にして！　そうしないと、この店、詐欺まがいのことしてるって言いふらすわよ！」

「ちょっ、ちょっと。そっ、それは……。じゅっ、十万円でいいです。はっ、はい」

店の主人はワケも分からず慌てて応えてしまった。

……勝った……

……アパートには『犬・猫禁止』って書いてあったけど、『ハシビロコウ禁止』とは書いてないからね……

＜六＞

その鳥は『たか』と名付けられた。

たかちゃんは大変おとなしく、ほとんど一日中はく製のように固まっている。頭も撫でられるし、餌やりの時は人に馴れたもので、くちばしを開いて入れてくれるのを待っている。

そのうち、ウメに本格的に馴れてきて、たかちゃんは部屋で放し飼いをするようになった。

日が経つにつれ、ウメには、たかちゃんが隆雄のように思えてく

るようになった。ウメはかつて研究所に勤めていたせいからか、ひょっとして隆雄の脳がこのたかちゃんに埋め込まれているのではないか、という妄想が頭を支配するようになっていった。

当面の生活費は貯金で賄えたので、ウメは研究所を辞めてから五ヶ月もの間、夜遅くまでやっている近所のスーパーに買い物に行く時以外は、たかちゃんと一緒にアパートに引きこもっていた。

ウメは一切の来客にも応じないでいたが、ある日新聞代の未払いにしびれを切らした販売店主が来て、ドアの前で大声をあげるのでウメは仕方なく扉を開けた。

その時に販売店主の見た光景。

ウメの身長は一五八センチ。その脇のたかちゃんが百四十センチ弱。

二人、いや、二匹、いや、ともかく並んで立っている。

たかちゃんは店主の方をじーっと見ている。

「あっ、あの。それは……。いったい何ですか？　はく製じゃないですよね」

慌てる店主。差した指をすかさず引っ込める。

「はい。生きてますが……」

「そっ、それ動きますか？　たしかテレビで見たことあります……」

「えっ？　そうですか？」

たかちゃんは突然、しかしゆっくりと前に出てきた。

店主はずるずると後ずさりする。
たかちゃんの目つきは相当に悪い。
「ちょっと、ちょっと待って……ごめん、ごめん。すいません」
何故か店長はたかちゃんに対してしきりに謝っている。
「ぎゃーあああ！！」
店主は真っ青になって一目散に走り去っていった。
……たかちゃん。あなた嫌われちゃったね。大丈夫。私がいるから……

◇◆◇

ウメの精神状態は、もはや普通ではなかった。気が狂ったようにたかちゃんをかわいがりだし、時には近所に聞こえるくらいの叫び声をあげることもあった。
そのうちウメは、うつ病のようになり、ある日を境にたかちゃんと一緒に心中することを考えるようになった。
「たかちゃん……死んでしまおうか」
たかちゃんは目つきが悪い。
しかしその時、たかちゃんの目はウメの目をまっすぐ見つめていた。

もう誰にも彼女を救うことはできない。だいいち、身寄りの無い彼女を救おうとする人自体、この世に存在していない。

ウメは引きこもりからほぼ半年経ったある日の真夜中、たかちゃんの手（手？　羽根？）を取ってアパートの屋上に上がった。

四階建てのアパートの屋上。

頭から転落すれば少なくともウメは亡くなるであろう。

たかちゃんはよくわからない。野生の鳥であれば飛べる。しかしたかちゃんはウメと同じく引きこもりなので、一度も飛んだことはない。

しかし、ウメにとっては、たかちゃんが死ぬか死なないかは問題ではなく、たかちゃんと一緒に飛び降りたい、という欲求を満たすことが目的となっていた。彼女は気が狂っていて、これまでたかちゃんの脳に隆雄の脳が埋め込まれて生きていると思い込んでしまっていた。

ところが、いざ死のうという時になって再び正気を取り戻したかのように思えた。

……隆雄はとうの昔に死んでしまっている……。

……だから、私もそこへ行けばよいのだ……。と。

ウメはたかちゃんの手（手？　羽根？）を引っ張り、屋上の柵の切れている場所に連れだした。そして自分も屋上から下の駐車場の方へ身を乗り出した。

……ああ。神さま。私は今、あなたのところへ行きます……。

その時突然。

たかちゃんが暴れ出した。いくら野生でないっといっても、そこから落ちたらまずいことくらい本能で察知しているのであろう。

たかちゃんは大きなくちばしを開き、ウメの足に噛みついた。

今だかつてウメはたかちゃんに噛み付かれたことはない。

これまでのたかちゃんからは想像できないほど野生強暴化している。

たかちゃんは、そのままくちばしの猛烈な力でウメを引っ張った。

「きゃあああ……！！」

ものすごい力である。しかも今まで見せたことの無い機敏な動作だ。

鋭く大きいくちばしを震わせながら、ウメの右足に首をぎゅうっとまわした。

放さない。

ウメはとうとう屋上の中央へ引き戻された。

それから、たかちゃんはうつ伏せになったウメの背中に乗り、今度は首に噛みついた。

再びウメの悲鳴が夜空に響き渡る。

「ぎゃあああ……！！」

ウメは必死だった。

「死なせて、お願い！　死なせて」

ウメは叫び、たかちゃんの羽根をかきむしった。

たかちゃんの血が飛び散った。

たかちゃんがひるんだ隙にウメは起き上り全速力で走り出した。

そして屋上の端。

そこから跳んだ。

すぐに地面が迫ってきた。

地面の寸前でウメは大きな羽根が見えたような気がした。

……ぎゃあああ！！　……

瞬間、ウメの右足の膝は激しい痛みに襲われた。しかし、それは地面に叩きつけられたような感触とは違う。同時に地面がみるみる離れ、ウメの居たアパートがどんどんと小さくなっていく。

満天の星空には、黒いシルエットの大きな鳥がばっさばっさと音をたてて羽ばたいていた。

＜七＞

ウメは気がつくと病院のベットに横たわっていた。

脇の椅子には遠藤雄二が座っている。

ウメは起き上ろうとして、雄二に優しく制止された。

「ウメッコ。気分はどうだい？」

「雄二……私」

「何も言うな」

「……」

「隆雄くんが助けてくれたんだよ」

「何？　何？　今何て言ったの？」

「隆雄君が助けてくれたって言ったのさ」

「本当？」

「死ぬことなんてこと考えてはいけないよ」

「ねえ。雄二。隆雄が助けたって……。本当？」

「僕がウメッコに嘘をついたことがあるかい？」

……あるある。嘘ばっかり……

病室はとても静かだった。

どのくらい意識を失っていたのだろう。もう西日が差している。

……何だか心地いい……

……もしかして、全部夢だったのかなあ。そんなことないかあ……。

ウメはキュッと右足に痛みを感じたので、浴衣タイプの病院の室内着をめくって自分の足を見た。

そこには包帯がぐるぐると巻かれていた。

露出した部分は太ももの付け根の方まで紫色になっていた。

…夢じゃないのね。でも。ホントに夢みたいな話……

ウメはふっと表情を緩ませた。

気がつくと、雄二の視線がウメの太腿の付け根あたりに釘付けになっている。

フレッシュピンクのシルクショーツが丸見えである。

「やだっ！　エッチ！」

ウメは室内着の前をあわてて閉じた。

雄二は少し残念そうな顔をした。そして、そのあとウメの目をしっかりと見据えながら言った。

「鳥は、研究所の中でずっと固まってるよ。部外者は研究所に入れないことは知ってるよね。目つきの悪い鳥に会いたいだろう？」

雄二の声は、とてもきっちりとした声だった。

ウメは自分に恥ずかしくて雄二の目をまっすぐに見ることができなかった。

しかし、おどおどと上目遣いに視線を合わせた。

そして照れくさそうに微笑んだ。

雄二はウメに選択の余地を与えないような厳しい口調で言った。

「目つきの悪い鳥に会いたかったら、ウメッコ、おまえは研究所に戻って来い！！」

雄二は微笑みながら、首を少し傾げて左目を閉じて見せていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4036o/

人造人間　～エピソード編～

2010年10月19日21時50分発行